

小学校のビオトープづくりを  
手づくりですすめる



千葉・千葉市  
越智メダカの会



千葉市緑区にある越智メダカの会は、越智小学校(児童数・約百四十八)のビオトープづくりで忙しい。山林に入り、草木を採取し、小学校の校庭に植えつける作業を行っている。この日もメンバーは会長の野崎正義さんが所有する山に入って、ツユクサ、コウゾウ、マンリヨウ、ミヨウガ、ヤマホトトギス、アケビなどの十数種類の草木を収集した。わずか一時間ばかりの作業にもかかわらず、トラック一杯の草木が採取できた。そして小学校のビオトープの予定地に植えていった。ビオトープの面積は、「おちの子ファーム」と名づけられた畑を含めておよそ一千平方メートル。これまで、工事現場から提供してもらった土をビニールシートの上にかぶせ、盛土し、その中央には水を張り池を作る作業をした。これは、メンバーたちが土曜日に集まって少しずつ作業を進めていった成果。しかし、まだ土が露出していて、草木がこの地を覆うまでには、もうしばらく作業を要するようだ。

同小学校でビオトープづくりを計画したとき、「街なかの小学校ならわかるが、こんなに緑に囲まれた小学校なのにビオトープなんて、果たして必要なの?」という疑問の声があがったという。

たしかに、同小学校の周囲は、一戸建ての住



宅団地があるものの、少し歩けば、越智町の中央を流れる村田川により谷地が形成され、農家が点在し、水田や里山が広がり、豊かな自然がある。

しかし、いまの子どもたちは、身近にある自然にふれようとはしないという。そこでビオトープづくり。「ビオトープが、子どもたちに越智の自然のすばらしさを知ってもらおうきっかけになる。むしろ、緑に囲まれた学校だからこそビオトープが必要」と説得したという。

実は、いま作業を進めているビオトープは、同小学校では二つめのビオトープになる。一つめは、同小学校が創立二十周年を迎えた平成十三年十二月に完成した。

このときには、児童、教師、PTAだけでなく、地域の人たちも参加して、手づくりで作られた。

平成十三年四月に設計図をつくり、五月から作業を開始した。間伐材を使って、土留用の杭や築山の階段をつくり、遊歩道には木材チップを敷き詰めた。山林に入り、草木と土壌運び、植えた。池には近くにある大藪池や村田川から採取した絶滅の危機に瀕しているというクロメダカやヤゴ、ドジョウなどを放流した。放課後や土曜日を利用してのこの作業は八か月をかけての完成となった。また、間伐材や木材チ



■連絡先 野崎 正義 千葉市緑区越智町1473  
電話 043-294-1544

ッブなどは最大限、寄贈を受けるなどした。完成後は総合的な学習や理科の教材として、そして「遊び場」として使われている。

そんな活動経験から立ちあがったのが、越智メタカの会。PTAの元・現役員、教職員、地域住民などが集まって、平成十四年五月に発足した。現在のメンバーは約四十五名。ピオトーブづくりとあわせて、村田川や大藪池の清掃・美化活動、里山保全のための下草刈りや間伐材除去作業、湧泉の再生、小学校のふれあい学習で子どもたちが組織している「われら村田川調査隊」への協力、支援、さらに、縄文土器も出土するというこの地の歴史の再発見と記録などの幅広い活動を行なっている。

昨年度まで同校の校長をし、ピオトーブづくりやこの会の設立に力を注ぎ、学校を異動しても、この会のメンバーである池田弘さんは、この地区にあるほかの五つの小学校にピオトーブが作られ、ピオトーブネットワークを作りたいとの希望を持っている。